特集　海外の大学との交流
目次

【事例紹介】・・1
COILという教育手法の導入
-南山大学の新たな国際化に向けての取り組み-
COIL as an Educational Approach: A New Internationalization Initiative
at Nanzan University
南山大学　国際センター　藤掛　千絵
FUJIKAKE Chie
(Center for International Affairs, Nanzan University)
南山大学　国際教養学部　山岸　敬和
YAMAGISHI Takakazu
(Faculty of Global Liberal Studies, Nanzan University)

【事例紹介】・・7
シンガポール国立大学語学教育研究センター日本語プログラムの交流活動
Exchange Activities in Japanese Language Programme, Centre for Language Studies,
National University of Singapore
シンガポール国立大学語学教育研究センターインストラクター　北井　佐枝子
KITAI Saeko
シンガポール国立大学語学教育研究センター准教授　ウォーカー　泉
WALKER Izumi
(Centre for Language Studies, National University of Singapore)

【事例紹介】・・14
日韓学生の協働によるグローバル人材育成
Global Human Resources Development through Collaboration
between Japanese and Korean Students
米子工業高等専門学校国際交流支援室長　浅倉　邦彦
ASAKURA Kunihiko
(Dean of International Exchange Division, National Institute of Technology(KOSEN),
Yonago College)

【海外留学レポート】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
はじめての留学ガイドライン
-スイス留学を踏まえて-
Study Abroad 101: With a Case Study in Switzerland
スイス連邦工科大学チューリッヒ校物理学科　有満　慶太
ARIMITSU Keita
(Department of Physics, Eidgenössische Technische Hochschule Zürich)

【海外留学レポート】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
留学の本質
ノブレス・オブリージュ
The Nature of Studying Abroad: Noblesse Oblige
ボストン大学4年　小林　聖弥
KOBAYASHI Seiya
(Undergraduate Senior, Boston University)

【事例紹介】

COIL という教育手法の導入

-南山大学の新たな国際化に向けての取り組み-

COIL as an Educational Approach: A New Internationalization Initiative at Nanzan University

南山大学　国際センター　**藤掛　千絵**

FUJIKAKE Chie

(Center for International Affairs, Nanzan University)

南山大学　国際教養学部　**山岸　敬和**

YAMAGISHI Takakazu

(Faculty of Global Liberal Studies, Nanzan University)

キーワード：オンライン国際連携学習、COIL

はじめに

COIL（Collaborative Online International Learning）は、オンライン国際連携学習の手法の一つで、インターネットを使って国境、文化を越えた学びの環境を学生に与えようというものである。ほかにも Virtual Exchange、Globally Networked Learning、Telecollaboration など様々な名称に代表されるように、このような試みはこれまでも多くの教員によって取り組まれてきた。中でも COIL は、アメリカのニューヨーク州立大学が独自に「COIL モデル」を提唱し、Collaboration を強調する点が他の交流手法とは一線を画すとされており、世界的な広がりを見せている。2018 年度に公募された文部科学省「大学の世界展開力強化事業」は、特にアメリカの大学との COIL を推進する事を目的としている。採択された日本の 10 大学は、それぞれの特色を生かしながら取り組みを進めている。本稿では、その 10 大学のうちの 1 つである本学の取り組みを紹介する。

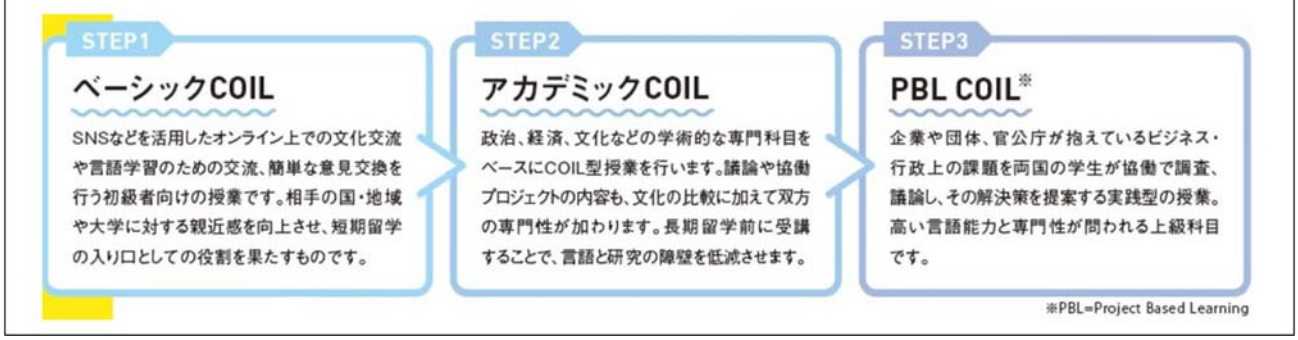
事例紹介

南山大学の COIL を活用した取り組みを、「NU-COIL」と呼ぶ（NU=“Nanzan University”）。本学では、オンラインツールによる交流や協働学習と既存の留学プログラムの融合に着目し、またさらに、留学

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

後に課題解決型の授業を地元グローバル企業とも連携して行うキャリア教育にもCOILを生かす取り組みを始めている。それを 3 段階に構成し、ベーシック、アカデミック、PBL としている（図を参照）[1]。

図：NU-COIL 概要



以下、二つの事例を報告する。まず、本学と Queens College, City University of New York のクラスが合同で行なったアカデミック COIL を紹介する。そして次に University of North Georgia への短期留学プログラムと連動させたベーシック COIL の事例を報告する。

＜アカデミック COIL の取り組み＞

・プログラム概要

このアカデミック COIL は、南山大学で筆者（山岸）が担当する「基礎演習」と、Queens College で Mari Fujimoto 先生が担当する「Introduction to Modern Japan」のクラスで行われた。前者のクラスでは、「外国人としての視点からの日本政治・社会・文化」をテーマに設定していた。COIL はテーマや学問分野が異なった二つの科目で行うことも可能であるが（その方が面白い結果を生むこともしばしばあるとされる）、この COIL は授業内容が類似している二つのクラスで行ったものである。

交流期間は約 5 週間で、最初に両大学の学生でペアを教員が設定し、お互いにまずメールで連絡をとり、使用する SNS を決定する。そして自己紹介のビデオクリップを送り合うという課題から始めた。プログラムの課題は、日米の学生が協働しながら日本に関する疑問を設定して、それについて日本での聞き取り調査を含めたリサーチを行い、最終的には 5 分程度のビデオを作成することとした。時差の関係上、相互のやり取りは授業時間内ではなく、自宅学習の時間などを活用して行われた。この課題への評価は、両科目で成績の 10%とした。

・プログラムの目的

「基礎演習」に COIL を導入した目的は、4 つある。第一は、この科目はもともと活発なクラス内でのディスカッションを含んだアクティブラーニング形式のものであるが、アメリカの大学の学生とも

[1] より詳細な情報は、南山大学の NU-COIL 専用の HP ＜https://office.nanzan-u.ac.jp/nu-coil/＞を参照。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ディスカッションを行うことによって、より学生が複眼的な視点を持つことである。第二に、時間帯や文化の違う、それも面識のない他者とプロジェクトを進めていくことによって、卒業後にも必要とされる国際的感覚を高めること。第三に、演習を受講している学生の英語力は、平均すると TOEFLiBT で 60 以上はあり、ある程度の英語運用能力は持っているが、アカデミックな文脈で英語を使用することが少なく、そのためにこのプロジェクトによって自身の英語力に自信を持つと言うことも期待された。最後に、多くの学生にとってこれまでにない経験をすることによって、学問をする上での新たな興奮や楽しさを味わって欲しいと言うことが COIL を導入した目的であった。

・成果と今後の課題

以上に述べたアカデミック COIL を導入した目的は概ね達成されたと考える。南山大学の多くの学生からは、「Queens College の学生から、日本についてこれまで気づかなかった点を指摘されて新鮮だった」、「これまで考えたこともない点について疑問を持ち、それについてアメリカの学生と一緒にリサーチしていく過程はとても勉強になった」などのコメントがあった。連日パートナーと Skype でビデオ電話を繰り返しながらビデオ作成をした学生もおり、当初想定していたよりも概ね活発な交流がなされたと言える。最終課題のビデオからは、それぞれが面白いテーマとリサーチクエスチョンを設定して、日米の学生が協力して制作した様子が伺えた[2]。

ただ、もちろん全ての学生が活発な交流ができた訳ではなかった。「会ったこともない外国人の学生と交流するのは初めてで、緊張してどのように議論を進めて良いのか分からなかった」と言うコメントにも象徴されるように、日本人学生の方にはこのプログラムを進めていく上での怖さや戸惑いもあったようである。そのためビデオ作成に本格的に取り掛かるまでにかなりの時間を要した学生がいた。また両方の学生に途中で連絡が途絶えてしまい教員が介入せざるを得ない状況になったこともあった。

このような怖さや戸惑い、学生個人のモチベーションに関する問題を全て解決することはできないが、教員の工夫によってある程度の問題について対処することができると考える。最も重要なのは、COIL を科目に取り入れることによって、「問題」が起こることは当たり前で、それを克服することが学生にとって学びにつながることを、事前に学生にしっかりと伝えておくということである。

前述したように、このようなことは卒業後に国際的な仕事をする上でよく起こることである。COIL はこれをどのように自分で解決するかを学ぶための場であるという心構えを学生は持つようにすることが重要である。日本人学生の多くは「外国人との交流」と聞くと、「日本や日本語に興味がある学生との楽しいもの」というイメージを持つ。しかし、授業内で成績の一部とされる課題を一定期間内で

[2] このビデオは Queens College のウェブサイトで公開されている
http://qcpages.qc.cuny.edu/~mfujimoto/EAST%20131/（2019 年 9 月 16 日閲覧）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

作成しないとならないようなアカデミック COIL ではそうならないことも多い。このようなことを教員は COIL を開始する前に学生としっかりと伝えることが重要である。さらにプログラムをより円滑に進めるためのより小さな工夫としては、パートナーのメッセージに対しては 24 時間以内に返信するというルールを設定する、全く交流が途絶えてしまうような状況が起こった時のために、「バックアップ課題」を設定しておくなども挙げられる。

＜短期留学プログラムと連動させたベーシック COIL の取り組み＞

・プログラムの目的

本プログラムは、University of North Georgia への 2 週間の短期留学とベーシック COIL を組み合わせたものであり、2019 年 1 月から 3 月に実施された。参加する学生たちが、事前に留学先の学生たちとオンラインツールを使用して交流をする新しい留学の形である。前述のアカデミック COIL と異なるのは、交流の内容がお互いに学んでいる言語をサポートしあったり、広い意味での文化交流を行ったりするという点である。

本プログラムの目的は、事前に決まった相手と交流することで、言語の壁と、異文化の壁を留学前に可能な限り取り払うことに加え、その学生がバディとなり迎えてくれることによって現地での異文化交流を更に促進させることである。本学からの参加者は、全ての学部から網羅的に選抜され、外国語学部、国際教養学部をはじめ、総合政策学部、経済学部、経営学部まで様々であり、総勢 10 名が参加した。事前の交流には 6 週間ほど費やし、留学期間は約 2 週間であった。事前のオンライン交流に参加したノースジョージア大学の学生は 4 名で、全員が Tomoe Nishio 先生が担当する日本語科目「JAPN3990」を履修している学生であった。南山大学側は、筆者（藤掛）が、事前交流を担当する教員となり、プログラムの引率も行った。

・事前 COIL の設計

事前 COIL を行うにあたり、Canvas という学習管理システム（LMS）用いることで、双方の教員と学生が共有できるプラットフォームを設け、スケジュールや課題の提出・確認を行った。共通の LMS を使用することの利点は、学生がいつまでに、何を、どのように提出すれば良いかを Canvas 上に記載しておくことで、双方の教員が、双方の学生たちの提出物を確認することが可能となるという点である。Canvas の他には LINE と Skype を併用した。特に Skype は録画機能があるため、学生同士がビデオでディスカッションしている様子を録画し、データとして教員に送信することができる。

事前 COIL の具体的な流れとして、まず、学生のグループ分けをした。North Georgia の学生が 4 名だったため、1 名の学生に対し 2～3 名の本学の学生がグループメンバーとなった。最初の約 2～3 週間は、主に日本語を使用する期間で、Canvas 内に提示された、日本の大学生活に関する簡単な読み物

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（日本語）を全ての学生が読み、North Georgia の学生は、グループのメンバーに尋ねてみたい質問を準備する。その後、学生たちは Skype でビデオチャットができる時間帯を見つけて約束し、その時間にグループディスカッションをする。それを録画したものを、データファイルとして Canvas 上に提出をする。毎週末に、その取り組みの振り返りをするために、「どのようなことを話したのか」「何を感じたか」というレポートを書かせる。それも、Canvas 上で提出する設計をしておく。続く後半の約 2～3 週間は、主に英語を使用する期間で、読み物（英語）を読み、本学の学生がそれに関する質問事項を用意し、Skype で、英語でのディスカッションに臨む。どのような質問をしたいか、事前に簡潔に書いて提出させ、教員が助言を行った。第二言語でのディスカッションとなるため、質問事項も第二言語で用意しているからである。

・成果と今後の課題

今回の取り組みは、短期間の留学だからこそ、意義のあるものとなった。留学に行ったことがない学生や、英語能力に自信がない学生も参加していたため、事前の交流において実際に会話をしたりメッセージを交換したりすることが学生たちにとっては緊張を解き、互いを理解しながら仲間意識を築くための貴重な機会となった。日本とアメリカの大学生活には多くの違いがあることに気づき、異なる環境で生活しているという発見がある中で、交流が進むうちに、早く現地でその仲間に会いたいという気持ちが高まっていった。また、言語に不安があった学生も、事前に交流する中で失敗を重ねながら、少しずつ不安を取り除き、また仲間意識が芽生える中で言語能力の不安を打ち消すような安心感が生まれつつあった。これが長期留学であれば、現地に行ってからしばらく時間があり、現地で本人が試行錯誤すれば仲間も自然とでき、それに伴い異文化理解も深まるかもしれないが、短期留学の場合、ともすると期待していたほどの成果が得られずに時間だけが過ぎてしまうことも考えられる。その点においても、事前 COIL で現地の学生たちとつながりあうことには大きな意味があると考えられる。

参加した学生たちからは、多くの前向きなフィードバックを得られた。事前にオンラインで交流したことで、「パートナーと実際に会ったときに安心感をもって話すことができた」「向こうの環境に自然と溶け込めた」「今回のように事前に交流する機会が今後増えていったらいいと思う」など、概ね良いコメントであった。改善点としては、時差をさらに考慮する必要性が挙げられる。ビデオ通話をグループで毎週行うことは、状況によっては難しいため、必ずしもビデオ通話ではなくビデオ録画を送信するという方法も今後は取り入れることも検討する。また、グループ分けをする時の人数バランスや、言語能力の差をできる限り考慮することで、学生たちがより効率的・効果的に課題を達成していける。最後に、これはベーシック COIL のみならず全ての COIL に共通して言えることだが、パートナー教員との綿密な打ち合わせやコミュニケーションを通して信頼関係を構築しておくこと、発生し得

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

る問題について議論しておくことは、その授業やプロジェクトを成立させるために重要である。

＜NU-COIL の現在の進捗状況と今後の取り組み＞

本学では、大学の世界展開力強化事業構想調書の中で、COIL 科目数を、2018 年度には 3、2019 年度には 17、2020 年度には 30、2021 年度には 38、2022 年度には 48 増加させていく計画を立てた。2018 年度と 2019 年度については目標を達成している。また 2020 年度に向けても、COIL に関心がある教員を募り、個別に説明するなどして協力教員の裾野を広げていく努力をしている。

COIL は、学生にとっても教員にとっても学びが多い取り組みではあるが、セットアップする際に時間を取られ、特に初回はうまくいかないことも多い。そのため、それに対応するために組織的なサポート体制を整えておく方が良いと考える。

最後に、この事例レポートには触れなかった PBL COIL について触れたい。これは、地域における企業や団体、官公庁などをパートナーとして招き、実際の異文化間の問題や課題を提供してもらい、日米の学生がそれらについて考え、解決策を提案するという NU-COIL の最終的な目標を象徴しているものである。

最初の PBL　COIL 授業は、2019 年 9 月（本学における第 3 クオーター）で実施される予定である。今年度においては、国際産官学連携 PBL A、B、C の 3 つの授業を提供する。全ての授業において、アメリカの大学との協働学習と、地元グローバル企業等とのコラボレーションが実現する。特に PBL　C においては、自動車部品製造会社から課題提供を受け、「未来の車」を学生たちが描いていく。アメリカの学生と本学の学生が協働で話し合いながら、将来どのような車が必要になるか、どのような車なら欲しいかを具現化し、プレゼンテーションビデオを作成する。その他 2 つの授業においても同様に、地元グローバル企業や在外公館から協力を得ている。学生たちが自ら探求心をさらに深め、海外の大学とつながることで、課題解決能力を備えたグローバル人材として将来世界で活躍できることを願っている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【事例紹介】

シンガポール国立大学
語学教育研究センター日本語プログラムの交流活動

Exchange Activities in Japanese Language Programme,
Centre for Language Studies, National University of Singapore

シンガポール国立大学語学教育研究センターインストラクター　**北井　佐枝子**
KITAI Saeko
シンガポール国立大学語学教育研究センター准教授　**ウォーカー　泉**
WALKER Izumi
(Centre for Language Studies, National University of Singapore)

キーワード：海外の大学との交流、バディシステム、プロジェクト型学習、協働学習

1.　はじめに

シンガポール国立大学語学教育研究センターでは 13 言語のコースを開講しており、その中でも日本語プログラム（以下、CLS 日本語プログラム）では毎学期 700 名程度の学生が日本語を学んでおり、日本語は最も人気のある外国語である。日本語 1 から 6 に加えてビジネス日本語や新聞読解コース等が開講されている。2017 年 8 月に入学した学生より日本語の副専攻が認められるようになったが、日本語の主専攻はなく、それぞれ専攻を持つ学生が選択科目として日本語を履修していることが大半で、そのため、日本語学習は容易ではない。主専攻の学業が多忙になって途中で日本語学習をやめてしまう者や卒業直前にしか選択科目をとれない学生も多い。その一方で、日本語学習に非常に熱心で初級から上級まで継続する学生も数多く存在する。そのような学生は自分の専門と日本語能力の両方を活かせる有能な人材に育っている。

そのように上級まで継続する学習者を育てるための要となっているのが「交流」である。交流活動は学習者の意欲を高め、長期的な学習者を育てる上でも、日本との親交を深める上でも、また、近年急増している企業からの需要に応える人材育成のためにも極めて重要である。本稿ではシンガポール国立大学の日本語学習者の日本への送り出しと CLS 日本語プログラムへの受け入れの 2 つの側面から

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

日本語学習者と日本との交流について述べる。

2. シンガポール国立大学（NUS）から日本への送り出し

シンガポール国立大学の学生を日本へ送り出す主な方法として下の三つがある。

2-1. 大学、学部、学科レベルの交換留学

大学レベルでの交換留学は、現在、九州大学、京都大学、慶應義塾大学、東京大学、東京工業大学、東北大学、大阪大学、名古屋大学、早稲田大学の 9 大学となっており、留学後はシンガポール国立大学の単位に交換できる。シンガポール国立大学の学生であれば日本語の学習の有無にかかわらず応募ができる。また、学部学科のレベルの正式な交換留学先として上記以外の大学もある。

2-2. 日本研究学科からのプログラム

日本研究を主専攻、副専攻とする学生は大学レベルのパートナー大学だけでなく、国際教養大学、関西学院大学、東京外国語大学、北海道大学、立教大学、立命館大学にも交換留学ができる。そのために日本学生支援機構（JASSO）、日本商工会議所、広島シンガポール協会、平和中島財団、三井化学、三菱商事、文部科学省などから奨学金制度も用意されている。

そのほか、多少の費用がかかるが、夏季特別コースとして九州や東京のフィールドトリップを主としたコースも開講しており、これは選択科目として日本研究科の学生でなくても履修できる。

また、単位としては認められないが、広島でのインターンシップ、広島と静岡のホームステイプログラムなどの短期プログラムもあり、日本研究学科の学生が優先されるが、日本研究学科以外の学生でも参加できる場合がある。

2-3. 語学教育研究センター（CLS）日本語プログラムからの短期留学プログラム

CLS 日本語プログラムではイマージョンプログラムとして、3 週間の短期プログラムに学生を送り出している。最近まで早稲田大学、同志社大学、東京農工大学の短期コースも CLS 日本語プログラムで募集、推薦していたが、現在では玉川大学と順天堂大学だけになってしまった。いずれの大学も奨学金が得られず、学生が全額負担しなければなくなったためである。さらに数年前までは国際交流基金、日本国際協力センター、地方公共団体による助成金や奨学金で、多様な交流プログラムへ送り出すことができた。しかし、最近は助成金や奨学金がほとんどなくなり、日本研究専攻以外の学生は、日本への短期留学や交流プログラムに参加できる機会を失っている。CLS 日本語プログラムの学習者の 9 割近くが日本研究以外を専攻しているため、非常に残念なことである。

なお、内容については、CLS 日本語プログラムからの短期留学プログラムはフィードバックに基づい

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

て年々改善されており、学生から好評を得ている。例えば、日本語を学ぶ他国の学生と知り合うことも有意義だが、日本人と交流する機会が短ければ学生の満足度が下がってしまう傾向がある。満足度が高いコースではバディシステムがあって、生活上安心だったり、日本語の学習にボランティアの日本人学生の継続的なサポートがあったりしている。午前中に日本語学習、午後に何回か文化活動や交流活動、休日に遠足等があり、学習のサポートだけでなく、文化活動も日本人学生とともに参加し、滞在期間中は継続的に交流できることも満足度を上げる要因となっている。

CLS 日本語プログラムで上級コースまで履修した者の中にはこのような短期留学の経験を持つ学生が非常に多く、日本での交流が日本語学習継続の一因となっていることは間違いない。残念なことは相手の大学側が受けていた奨学金が打ち切られ、そのようなコースの存続ができなくなったことである。日本研究専攻の学生は日本研究科の豊富な奨学金制度や優遇されたプログラムで何度も日本との交流機会があるが、日本研究が専攻ではない日本語学習者にとっては日本への短期留学の機会が激減してしまった。それは継続的な日本語学習者、ひいては有能な人材育成の大きな機会損失である。よって、CLS 日本語プログラムでは日本国内で夏季短期日本語プログラムが開催できる新たな提携大学を模索している。可能性がある大学はぜひご連絡を願いたい。

3. CLS 日本語プログラムでの受け入れ

先に述べたとおり、日本研究専攻以外の学生が日本への短期留学や交流プログラムに参加できる機会は限られている。そこで、CLS 日本語プログラムのコースでは、日本からの訪問者をゲストとして招いたり、いっしょに出かける機会を作っている。特に、日本語 3 以上では、シンガポールの日本語コミュニティーと協力して毎学期コースの中で何某かの交流会を行っている。例えば、日本人小学校や早稲田渋谷シンガポール校など、毎年交流を重ねている教育機関もある。

交流会を成功させるためにはその場限りの交流だけではなく、事前によく準備をする必要がある。ウォーカー（2018）は特にタスク遂行型や協働型の「プロジェクト型学習」が日本語学習そのものの楽しさや意義を実感でき、日本語学習をできるだけ長く継続するために成果をあげていると述べている。

3-1. 日本の大学や地方公共団体からの訪問者との交流

もっとも頻繁に行われている形は日本の大学生たちが大学や地方公共団体が主催した短期研修でシンガポールを数日間訪問、CLS 日本語プログラムの授業に訪問するパターンである。高校生やボランティアのご年配グループを受け入れたこともある。日本語学習者たちも訪問者もそれぞれが事前に準備したタスクを発表したのち、ディスカッションや質疑応答を行う。当方の目的が日本語学習なので、訪問者にも日本語でお願いしているが、訪問目的によっては訪問者が英語で発表することもある。授

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

業以外の時間にもキャンパス案内をしたり、学食で食事をしたり、シンガポール観光で出かけたりすることもある。

プロジェクト型学習では、現実的なタスク、例えば、案内状やお礼状の作成など十分な準備をすることが重要である。中上級のプロジェクトとしてはシンガポールのお国事情や社会問題、初中級のプロジェクトとしては大学、趣味の紹介などがトピックに上がることが多い。学生の日本語のレベルを見極め、どのようなタスクを課し、対面時にどのような活動をするか、活動後にどのようなリフレクションを行うか、などを慎重に計画した上で実践することが重要となる。また、それらの活動は学習者が主体的に行うのが最も理想的である。それが可能となれば、学期終了後も学生同士で連絡をとりあったり、お互いを訪問しあったりするなどして、その後も親睦が深まっていくからである。交流がこのようなきっかけとなりうるか否かは、双方の教師または担当者の力量にかかっていると言っても過言ではない。

また、2012 年から 2015 年まで早稲田大学が SEND プログラムを実施し、日本語教育を専攻する日本人や日本語母語話者に近い外国人大学院生をインターンとして 3 週間受け入れた（浜崎ほか 2016）。大学院生たちがトピックを決めて日本語の特別模擬授業を行ったり、自分が得意な文化活動的な授業を行ってもらったが、教師視線ではない若者の教育実践は当方の学生たちにも新鮮で、有意義な交流となった。それらの教育実践後は CLS 日本語プログラムの教師がフィードバックを与えたが、このような現場の教師からのフィードバックは日本語教師を目指す大学院生にとっても意義のあるものであったと思われる。しかし、SEND プログラムも奨学金が継続できなくなったとの理由で４年で終了してしまい、残念である。

3-2.　シンガポールの日本関連機関や在留日本人との交流プロジェクト

シンガポールの在留日本人は３万人を超え、世界でも 3 番目に大規模な日本人学校がある。中でも日本人小学校と早稲田渋谷シンガポール校はシンガポール国立大学に隣接しており、交流は 10 年以上毎年続いていて、プロジェクトの型も安定してきている。最近では日本語 3 のコースで小学生を相手にキャンパスのパンフレットを日本語で作成、グループで大学キャンパスを案内、日本語 4 で高校生を相手にお出かけプラン募集のポスターを作成、グループごとにシンガポールの町に出かけ、事後発表会を行っている。また、高校の学園祭や英語のスピーチ大会に参加して日本文化やクラブ活動を経験したり、スピーチ大会の審査を手伝うなどの訪問交流も行っている。

また、定期的ではないが、日本人会の「日本語を話そう会」などをゲストとして招いたり、学生が選んだ日本語の本を推薦するビブリオバトルを行い、審査に在留日本人を審査員として招き入れることもある。そのような機会は学生自身が作る場合もあるが、ほとんどが教員の伝手である。今後は学習者が主体的に交流相手を探せるよう支援をしていくことも重要であると考える。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

3-3.　シンガポールの企業訪問と日本からの大学生との協働

ビジネス日本語のコースでは、学習コミュニティーを醸成することを目的とした協働型プロジェクト学習を行っている。シンガポールの日系企業を訪問してインタビューを行い、学期末には企業人を招待して発表会を行うというプロジェクトである。数年前からは、そのような活動を日本人大学生との協働学習として実践している。異文化コミュニケーション能力や協調性を高めるなど、グローバル人材に求められる社会人基礎力の向上も目指している（ウォーカー2018、ウォーカーほか 2018、2016）のである。日本人学生たちは学期の初期のころからメールや SNS 等でやりとりをし、短期間のシンガポール訪問中に企業訪問を行い、帰国後もオンラインでやりとりをして発表原稿作成などを支援する。ビジネス日本語の学生たちは敬語を習い始めたばかりの段階であるため、企業訪問をして企業人の前で発表をするというのは極めて大きな挑戦であるが、日本人大学生と協力しあうことにより、さまざまな困難も乗り越えられる。日本人学生たちにとっても、グローバル企業を訪問する機会を得られるばかりでなく、シンガポール人学生との対面学習やコミュニケーションを通して、批判的思考や問題解決の方法を学べるなど、お互いに有意義な経験となっているようである。中には異文化による軋轢を経験することもあるが、お互いに深くかかわることで空港では涙の別れとなり、学期終了後も交流が続くような絆も生まれている。しかしながら、このプロジェクトは学習プロセスが長いだけに参加者のマッチング、協働の活性化など学習コミュニティー構築には教師の適度な教育的介入が必要である。

3-4.　課外活動

日本語 1 や 2 のコースは学習者の人数が 300 名前後もおり、公平な交流機会が保ちにくいことやまだ日本語学習を始めたばかりで日本語でのコミュニケーションが困難なことから、定期的な交流は行っていない。しかし、英語がある程度できる日本人学生となら、初級でも交流活動は可能であるため、訪問依頼がある場合は、有志を募り、授業時間以外で交流活動を行うようにしている。

さらに、交流活動を増やすために、かつては授業時間外に「おしゃべり会」と称して初級から上級までの日本語学習者から有志と在留日本人を集めて文化活動を行っていたこともあるが、教員の退職で継続が困難となった。

ほかにも過去には日本人学校教員のシンガポールのお宅に週末にホームステイをさせてもらう活動が数年続いていたが、教員数が大幅に減らされたり、双方の担当教員が離任したことなどにより、現在は行っていない。担当者が変わっても存続するためには、お互いに無理のない交流を実施することが肝要であると思われる。

学生の自主的な活動としては、日本研究学科の元で学生が組織する日本研究会というクラブが存在

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

し、毎年ジャパニーズ・カルチャラル・フェスティバルという催し物を学内で行っており、学生や在留日本人も集まってくる。また、日本研究会の下には茶道部、舞踊部、音楽愛好会、箏アンサンブルも存在し、それぞれ個別の活動を行っている。日本研究会では仲介業者の紹介で日本人学生にシンガポールの観光案内をするアルバイトも請け負っている。日本研究会の多くのメンバーは必ずしも日本語学習者というわけではないが、日本に興味を持ち、日本文化を愛する学生の集まりで、それぞれの分野で交流も行っている。

筆者北井は、「KotoKottoN」という箏アンサンブルを 2009 年から始めた。大学のクラブ組織としては日本研究会の下にあるが、メンバーのほとんどが CLS 日本語プログラムで日本語を学んでいる。これまでにフィリピン大学音楽学部の箏を主専攻、副専攻する学生をシンガポールに呼び寄せてワークショップをしたり、オーストラリアの箏フェスティバルにメンバーを自費で参加させたりしていて、多くのメンバーが各地の箏奏者とフェイスブックでつながっている。今年は東日本大震災のあとに建てられた陸前高田市のシンガポールホールで箏演奏、ホームステイもさせてもらった。地元の交流への熱意と復興を応援する会社の支援があって一部の自己負担で実現できたことであるが、志があるところに交流は生まれ、そこから絆が育っている。

4. おわりに

CLS 日本語プログラムでは、本稿で述べてきたような多様な交流を実践してきた。それを通して実感していることは、交流は学習者の意欲を高め、長期的な学習者を育て、企業からの需要に応える人材育成のために極めて重要であるということである。従って、今後もさらに促進できるように努めていきたい。

今後の課題としては、日本への送り出し機関の拡大に新たな掘り起こしが必要であるということである。日本への短期留学や交流プログラムは、シンガポールでの交流に勝るインパクトがあるからである。そのためには、現在実施しているプログラムによりよい学生を集め、対外的にアピールすることも大切であろう。

また、CLS 日本語プログラムで受け入れる交流活動についてはタスク遂行型プロジェクトを終わらせるだけでも十分な価値があると思うが、協働学習により学生間、教師間の絆を深めていけば一層有意義な活動となる。それには学生の負担を考慮しながら、まず双方の教師がお互いの学生をよく知った上で綿密に企画を立て、学習者主体の活動を促進していく方法を検討していく必要がある。

さらに、日本語話者との交流だけでなく、日本語学習者同士で「学習コミュニティー」を構築、醸成していくことも考えられる（トンプソン木下千尋 2016、2017）。ここ数年は、日本語 1 の学期末に、中上級の学生を招いて日本語学習の方法や経験を語ってもらったり、箏アンサンブルのメンバーに箏演奏をしてもらったりしてきた。先輩の話は後輩の日本語学習の継続を促すことに役立っているよう

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

である。よって、それらの活動を学期中に活性化する方法を確立し、「学習コミュニティー」の構築を促進することにより、日本語教育のさらなる発展につなげていきたいと考えている。

参考文献

ウォーカー泉（2018）「プロジェクト型学習を成功に導く『協働』とはー日系企業訪問プロジェクトに基づくー考察ー」,『東南アジアにおける日本語教育の研究と実践』2018 年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム, pp.33-39

ウォーカー泉・高木裕子（2016）「グローバル化に向けた人材育成のための「二国間協働学習」デザインと教師の役割」,『シンガポールビジネス日本語教育国際研究大会論文集』, pp.25-36, <https://drive.google.com/file/d/0B3yBvHwajj21cnpsS084UlppQUk/view> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

ウォーカー泉・森川洋子・伊藤明子（2018）「シンガポールの日本語教育事情 ーグローバル人材育成に向けた取り組みー」,『日本語教育学会ー世界の日本語教育ー』<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/05/sekai-singapore0501.pdf> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

トムソン木下千尋編（2016）『人とつながり、世界とつながる日本語教育』くろしお出版.

トムソン木下千尋編（2017）『外国語学習の実践コミュニティー参加する学びを作るしかけー』ココ出版.

浜崎譲・ウォーカー泉・大塚陽子・北井佐枝子（2016）「シンガポール国立大学における SEND プログラムの実践ー語学教育研究センター日本語プログラムー」,『早稲田日本語教育学』2016 年 12 月第 21 号, pp.187-192, 早稲田大学大学院日本語教育研究科.

「順天堂大学国際教養学部 NEWSーシンガポール国立大学からの留学生のバディをしました」2019 年 7 月 2 日付 <https://www.juntendo.ac.jp/ila/sp/news/20190702-06.html> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

「玉川の教育ーシンガポール国立大学の学生が見た日本とは？日本語短期研修で今年も来日した学生による日本語発表会が行われましたー」2019 年 7 月 12 日付 <https://www.tamagawa.jp/education/report/detail_16308.html> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

「CLS Japanese Language Programme, NUS」『Facebook』 <https://www.facebook.com/JapaneseLanguageProgrammeNUS/> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

「e-RAIONーHistoryー」<https://courseware.nus.edu.sg/e-raion/photo_g.htm> 2019 年 9 月 23 日アクセス.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【事例紹介】

日韓学生の協働による
グローバル人材育成

Global Human Resources Development through Collaboration between Japanese and Korean Students

米子工業高等専門学校国際交流支援室長　**浅倉　邦彦**

ASAKURA Kunihiko

(Dean of International Exchange Division,

National Institute of Technology (KOSEN), Yonago College)

キーワード：日韓学生協働、グローバル人材育成

１．はじめに

米子工業高等専門学校（以下、米子高専と記載）が位置する鳥取県米子市周辺では、鳥取県は韓国の江原道と友好提携を、米子市は江原道の束草市と姉妹都市提携を結び、航空便や定期貨客船などの交通アクセスも整備され、双方地域の活性化に繋がる幅広い分野での交流が継続的に行われている。また、北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミットでは、各地域政府間の相互協力及び友好関係を、今後いっそう積極的に推進・発展していくことで一致している。

このような状況を踏まえ、地の利も活用し、米子高専では韓国の協定校である南ソウル大学及び群山大学と連携し、日韓学生の協働によるキャリア研修、語学研修、科学技術研修、リベラルアーツ研修等を通じた次代を担うグローバル人材育成事業を実施している。本稿では、受入プログラムである「地域と共に考える環日本海海洋環境問題」及び「科学技術インターンシップ」、派遣プログラムである「韓国文化理解研修」の各事例を紹介する。

２．受入プログラム：地域と共に考える環日本海海洋環境問題　ー海は人をつなぐ研修ー

日本海沿岸には、対馬海流が運ぶ日本国内からの海洋漂着ゴミに混じって環日本海諸国からのゴミも散見される。鳥取大学と共催する本プログラムは、こういった海洋漂着ゴミを地域の協力の下、留

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学生を含む本校学生と韓国からの短期留学生が協働して回収し、海洋環境問題を共に考えることで、地球の一員としての倫理力を備えたグローバル人材を育成することを目的としている。また、日韓両国の心温まる交流の歴史をたどり、海を介した人のつながりを体感すること、様々な文化交流を通して相互に異文化を理解することも大きな目的である。実施期間は、韓国の大学の夏季休暇が始まる 6 月下旬から 7 月上旬にかけての約 10 日間である。活動地域は、鳥取県、兵庫県北部、京都府北部、福井県西部と広域にわたるが、そのうち鳥取県西部(米子・境港・大山プログラム)、福井県西部(若狭湾プログラム)を本校が担当している。今年度は、南ソウル大学から 8 名と群山大学から 6 名の学生を受け入れ、本校からは、日本人学生 23 名と留学生 5 名が参加した。なお本プログラムは、2015 年度から独立行政法人日本学生支援機構の留学生地域交流事業として公益財団法人中島記念国際交流財団の助成を受けて実施している。

（1） 米子・境港・大山プログラム

米子高専が所在する鳥取県西部の弓ヶ浜半島は北西に向かって細長く伸びた砂州で、その日本海側には「日本の白砂青松 100 選」に選定される美しい松原をともなった砂浜が広がる。この砂浜にも海洋漂着ゴミが点在するため、日韓学生が協働で回収し、ゴミの量、種類、由来等の調査を行う。大半の漂着ゴミは日本由来のものであるが、韓国、中国などの環日本海諸国からのゴミも混じっている。薬品ボトルなどの危険物が見つかることもあり、驚かされる。今年度は受入初日に海洋漂着ゴミ回収を実施し、本校からは今年 9 月の韓国文化理解研修に派遣予定の学生 22 名が参加して、韓国学生と共に環境問題について検討した。上の写真は海洋漂着ゴミ回収後の検討会の様子である。猛暑の中、日韓学生が共に汗を流しながらゴミを拾い、そこで交わされる会話をきっかけに心が打ち解け合っていく様子に、明るい未来を感じさせられた。海洋漂着ゴミ回収の他に、本プログラムでは本校茶華道部による茶道体験、大山青年の家でのうどん作り体験などの日本文化体験を通じた異文化交流も実施した。特にうどん作り体験は、日韓学生の混成グループによる協働作業の中で自然とコミュニケーションを取ることができ、お互いの仲を深めることができる非常に有意義な交流の場となっている。

鳥取大学プログラム、若狭湾プログラム(後述)を経て、帰国前に再び鳥取県西部で交流活動を実施した。帰国の前夜は、日韓学生＋本校留学生（イ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ンドネシア、マレーシア、モンゴル、ラオス)の混成グループごとに、約 10 日間のプログラム全体の振り返りを行い、最後にまとめたポスターを使った報告会を行った。プログラムを通して親交を深め合った仲間との振り返りは非常に盛り上がり、プログラムのまとめに相応しい活気のあるイベントとなった。写真は発表後の集合写真である。参加者全員の笑顔が印象的な一枚である。

（２） 若狭湾プログラム

若狭湾は日本海側では珍しい大規模なリアス式海岸が特徴で、その風光明媚な地形は国定公園に指定されている。この若狭湾には、特徴的な海岸がゆえに多くの海洋ゴミが漂着する。本プログラムでは、若狭湾青少年自然の家を拠点とし、海洋漂着ゴミ回収に加え、スノーケリングによる海中ゴミ調査、ボート、カッターによる海上からの漂着ゴミ調査を実施する。併せて、小浜市にある韓国船遭難救護の碑を訪れ、約120年前に遭難した韓国船の救護にまつわる心温まるエピソード[1]を救護者の子孫・大森和良氏から拝聴し、海を介した人のつながりを体感する。

今年度の若狭湾プログラムには、本校留学生 5 名、日本人学生 1 名が参加して韓国学生 14 名と共に海洋環境問題を考えた。陸からは見えない所にも多くの漂着ゴミがあることを知り、環境問題を広い視野で多角的に考える契機となっただけでなく、これまで意識せずに行っていた環境への配慮を欠く行動を見直す良い機会となったようである。また、よさこい祭り体験や保育園訪問を行い、日本の文化や幼児教育を肌で感じる経験をした。よさこいを披露する際の真剣なまなざし、園児たちの無邪気な笑顔、地域の方々のおもてなしの心に一同感銘を受けた。参加者からは、「この研修での異文化交流を通して、言葉の壁を乗り越えてお互いを理解し合えるようになった。」、「たくさんのことを学ぶことができ今後の人生に活きるいい経験ができた。」との声があった。写真は韓国船遭難救護の碑での集合写真である。写真の一番右が大森氏である。

（３） よなご国際交流フェスティバル

[1] 明治 33(1900)年 1 月 12 日、15 日間漂流し漂っているところを漁村・泊村(現小浜市泊地区)の村民に救出され、93 人の乗員は全員無事に帰国できた。言葉も通じない中で、なんとかお互いの習慣の違いを理解し、乗員たちは「このもてなしの心を忘れません」と言葉を残し、帰国の途についた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

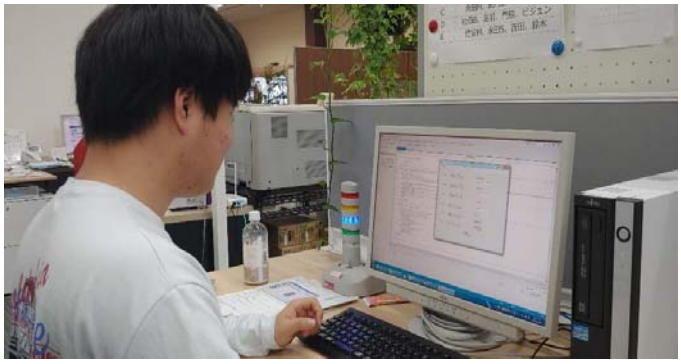
毎年 9 月に開催される標記イベントにおいて、本校留学生を中心としたメンバーで環日本海海洋環境問題に関するポスター展示、海洋漂着ゴミのサンプル展示を行い、来場する地域住民と共に考えることで、地球社会に貢献できるグローバル人材育成を推進している。参加した留学生からは、「留学先の地域の問題を地域の人たちと共有できて良かった。」、地域住民からは、「弓ヶ浜に外国からのゴミが漂着してきているなんて知らなかった。」といった声があった。写真は展示ブースの様子である。

３．受入プログラム：科学技術インターンシップ

2016 年度から実施する本プログラムは、韓国の交流協定校から学生を約半年間本校に受け入れて、科学技術研修、就業体験、専門科目・日本語講義の聴講に加え、韓国語講義のティーチングアシスタント、地域交流、日本文化体験等も実施する科学技術インターンシップである。本プログラム全体を通して本校学生と協働する場面が多くあり、本校学生にとっても異文化理解、グローバルマインド育成の機会となっている。

現在、韓国は未曽有の就職難にあり、日本での就業を希望する学生が多い。一方、日本国内、特に地方における人材不足は深刻な状況にあり、海外からの人材受け入れを促進してく必要がある。こういった状況下で、将来的に日本での就職を視野に入れている韓国の学生に実践的な工業系知識と日本国内で生活体験を提供し、県内企業にはインターンシップとして一時的な受入を通して実際の雇用に備える機会を提供することで、双方の問題解決の一助とすることも本プログラムの狙いの一つである。さらに、鳥取県が推進している企業と高度外国人材とのマッチング機会の提供等、様々な支援について企業へ橋渡しする役割を担い、地域貢献も果たしている。

昨年度は、9 月下旬から 2 月下旬の 5 ヵ月間、群山大学産業融合工学部ソフトウェア融合工学科 2 年生の学生 1 名を受け入れた。科学技術研修では、ソフトウェア工学が専門の指導教員の下で、まずプログラミング言語の一つである C#(シーシャープ)言語の演習を行い、プログラミング技術の向上を確認した後、「ブロックス(Blokus)」とよばれるチェスに似た頭脳を使うボードゲームのソフト開発を行った。受入学生は、群山大学ではチームプロジェクトの分担作業しか経験していなかったが、本校での研修で初



独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

めて全て一人で開発したため、プログラミング技術の向上を実感する有意義な体験となったようである。

また、鳥取県と連携して企業マッチングを行い、地域の情報系企業での 5 日間の就業体験の機会を得た。派遣先企業では、Visual Basic を用いた機械制御プログラムとそのインターフェース作成、データベース構築の実習を行い、日本企業の就業環境を知る貴重な体験となった。写真は就業体験の様子である。

昨年度の受入学生は、ソフトウェア工学やマイコン制御、計算機工学などの専門科目、日本事情などの留学生向け一般科目を聴講し、専門知識の習得と日本語能力の開発を行った。本校 5 年生向けに開講する韓国語講義では、ティーチングアシスタントとして韓国語の音読、発音練習の支援、韓国の文化や流行などの紹介を行った。なお、聴講した科目については本校より聴講証明書を発行し、それに基づき群山大学において単位認定がなされている。

このような長期間の受入の場合、受入学生のメンタルサポートが非常に重要である。本プログラムの担当者は、週 1 回 90 分間の面談時間を設けて研修の様子、生活の状況を常に把握するよう努め、必要なアドバイスを適宜与えた。また、地域交流や日本文化体験等をバランスよく実施し、リフレッシュする機会も提供した。地域交流としては、本校に隣接する米子市立彦名小学校への出前講座を実施し、韓国の遊びを教えて一緒に体験したり、鳥取県に関するクイズを解答したり、お互いに笑顔になる体験をした。日本文化体験としては、松江城、出雲大社等の日本文化を体験できる史跡の見学や温泉の体験をした。写真は松江城での記念撮影で、写真中央の受入学生も本校スタッフ、学生と一緒に楽しんでいる様子がうかがえる。

４．派遣プログラム：韓国文化理解研修

本プログラムは、韓国協定校の学生との交流を通して韓国文化を理解すること、異文化異言語世界で直面する困難を乗り越える能力を育むことを目的とし、2013 年度より毎年実施としている。主な研修内容は、韓国企業見学や大学工学部体験を通した科学技術研修、フィールドワークを通した異文化交流研修、歴史的史跡や施設見学を通した歴史研修で、「海は人をつなぐ研修」で受け入れた韓国学生を中心とする学生カウンターパートとの協働により実施する。実施時期は本校夏季休業中の 9 月上旬から中旬の 8 日間(昨年度まで 4,5 日間の短期プログラムと並行実施)である。活動場所は、韓国の中心ソウルと、本校協定校が所在する天安、群山とその周辺地域である。今年度は本校学生 21 名を派遣

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

して実施予定である[2]。

昨年度は、低学年の学生を中心とした「韓国研修旅行」を 9 月 7 日(金)～11 日(火)に、国際交流事業への参加経験のある学生を中心とした「韓国ステージアップ研修」を 9 月 7 日(金)～14 日(金)に実施した。同一行程となる前半の 5 日間では、研修旅行 8 名・ステージアップ研修 6 名、計 14 名の参加学生が、サムスン・イノベーション・ミュージアム(SIM)やセマングム防潮堤の見学といった海外技術

研修、南ソウル大学と群山大学の学生とのフィールドワークや交流授業などの異文化交流研修、ソウルの故宮博物館や百済最後の都・扶余の扶蘇山城他での歴史研修を実施した。初めての海外体験だった学生も多く、はじめは緊張した様子だったが、帰るころには笑顔が溢れ、「帰りたくない。また来年も参加したい。」、「もっといろんな国に行ってみたい。」などの声が多々あった。写真は左から、扶蘇山城での集合写真、交流授業の様子である。

9 月 11 日(火)より研修旅行と別行程となったステージアップ研修参加の 6 名は、群山大学工学部の授業参加や研究室訪問、人文学部での日本語授業支援などの大学体験、ヒュンダイ自動車の工場見学、ホームステイ体験など、少人数研修ならではの濃密な研修を体験することができた。参加学生からは、「外国から日本を眺めることで、日本のことをより知ることができた。」、「今後の人生における自信に繋がった。」といった声があった。写真は群山大学工学部での研修室訪問の様子である。

５．おわりに

このように米子高専では、日韓双方向育成事業を通じ、心の通った様々な交流活動によって異文化理解を促進すると共に、異文化異言語世界で直面する困難を乗り越える能力を育み、地球の一員とし

[2] 本稿執筆時点では実施前

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ての倫理力を備えたグローバル人材の育成を推進している。

今年7月にモンゴルで開催された第24回北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミットにおいて、韓国江原道代表者[3]は昨今の日韓関係の悪化について憂慮の意を表し、日韓交流のモデルと評される両地域の交流が途切れることなく続いていくことを要望している。米子高専においても、実り多い本交流プログラムを今後も継続し、日韓両国のグローバル人材育成を引き続き推進していく考えである。

[3] 鄭萬昊(チョン・マノ)氏、現韓国江原道経済副知事

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【海外留学レポート】

はじめての留学ガイドライン

-スイス留学を踏まえて-

Study Abroad 101: With a Case Study in Switzerland

スイス連邦工科大学チューリッヒ校物理学科　**有満　慶太**

ARIMITSU Keita

(Department of Physics, Eidgenössische Technische Hochschule Zürich)

キーワード：留学全般、スイス留学

初めに

この記事では私の留学経験について簡潔にまとめたいと思う。まずは簡単に来歴から説明すると 2014 年に大学に入学し 2017 年 9 月～2018 年 8 月までスイスに交換留学をしていた。その後は 2019 年 3 月に大学を卒業し、9 月から交換留学先の大学院に今度は正規留学をしている。従ってこの記事では主に交換留学について言及し、大学院留学についてもわかる範囲で述べたい。

留学経験をまとめるといっても、「私は〇〇に行って、〇〇の勉強をした。…」のようなよくある留学体験記は調べたらすぐ出てくることで、私が書く意味もなさそうなので本記事では私の留学経験を踏まえ、留学を考えている読者がどのようなことに気を付けたほうが良いのかを主眼に置いて、なるべく役に立つような情報を伝えたいと思う。

交換留学の動機

留学を終えた後、私は大学で留学アドバイザーをしていた。これは主に留学を考えている学生の相談に乗る仕事であったが、よく聞かれる質問が「どのようなプログラムがありますか？」であった。ここから推測される留学を考えている学生の心理は次のようなものである:何となく留学をしたいが、自分に合う留学が分からない。これに対する返事はいつもこうであった。「なぜ留学をしたいのですか？」このような質問をすると、大抵答えに詰まっていた。しかし、留学の動機というものは留学するためにも留学中でも大切であることを述べておきたい。まず留学をしようと思ったら選考に通る必要がある。これは書類選考であったり、面接であったりするが、とにかく受かる必要がある。そしてこの選

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

考において、絶対に留学の動機が聞かれる。したがって最低限なぜ留学するかは説明出来ておいたほうがよい。さらに、留学の動機は留学中の心の支えになる。当たり前だが留学はとても苦労をするものである。私は常にホームシックであった。「私はこれをするためにここに来たのだ」という心の支えが必要なのだ。さて、私の留学の動機であるが、「海外の大学院で勉強してみたい」というものであった。大学院留学というと響きはかっこいいが、具体的に何が海外の大学院が日本の大学院よりも優れているのかは誰も教えてくれなかったので、まず自分で 1 年経験してみよう思ったのである。

留学先選び

上に述べた留学の動機から、留学先は将来自分が受験しそうな大学院に限られる。さらに大学が提携している一番「名門」な大学はスイスの大学であった。したがってスイス留学を決めたわけである。ここで留学先選びについても少し述べておきたい。留学先は留学の動機及び専攻に多分に依存するが、アカデミックな動機で留学をする生徒に対しては、私は次のように考える:「名門」校に留学してみたらよいのではないだろうか。「名門」と鉤括弧付きで書いたのは「日本人が知っている」という意味ではないことを強調するためだ。よく留学雑誌などには「name value で決めるな」、「校風をよく調べよ」ということが述べられているが、果たしてどこまでこのアドバイスを鵜呑みにしてよいのだろうか。自分の大学受験を思い出してほしい。Name value は無視しただろうか？そこまで校風を真剣に調べただろうか？多くの場合は模試の成績を基に狙える「名門な」志望校を絞り込み、同じ位の偏差値の大学が複数あった場合は校風が合うかを少し考えたくらいではないだろうか？私は全く同じ方法で留学先も決めてしまえばよいと思う。「name value で決めるな」という主張は、日本人があまりにも海外の大学(院)について無知であることを反映したものであると思う。ETH[1]と言われてピンとくるだろうか？LSE[2]と言われてピンとくるだろうか？これらはそれぞれ理系および文系の、ヨーロッパでは知らない人はいないような大学院であるが、日本人で知っている人はあまりいないと思う。したがって自分の専攻が強い地域及び大学がしっかりとリサーチできたのなら、その中で一番だと思われる大学にチャレンジすべきであり、そのために海外の大学(院)事情に詳しくなることは一番初めの、そしておそらく一番大切な留学のためのステップであることを忘れてはならない。

留学準備

留学の動機及び留学先の志望校がはっきりしたとしよう。次に行うことは選考を通過することであるが、そのために大切なことは言語と成績である。私は留学先で主に使った言語は英語で試験としては TOEFL iBT を受験したのでそのことについて書こうと思う。まず持論として、TOEFL100 点程度なら

[1] スイス連邦工科大学
[2] ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

日本での勉強で十分だし、逆にこれくらいのスコアが意味のある留学、つまり英語を理解できるように頑張ったら 1 年が終わっていたみたいにならないためには必須なのではないかと思う。一応私が何をしたかを述べておくと、まず大学の英語オンリーで行われる授業を受講し、毎日その授業で知り合った留学生と会話を心掛けた。それに加えて週 1 回くらいで英作文の添削を日本語の添削と引き換えにしてもらった。次に成績についてであるが、これもかなり重要視されるし、交換留学の場合、奨学金は成績で足きりがある場合があるので GPA3.5 くらいは取っておくとよい。実際に私の大学の場合、交換留学生には JASSO の奨学金が支給されたが、GPA3.3 以上の学生に対してはそれ以下の学生に対してよりも多く支給された。時期的には 9～12 月に申請があるはずだから、留学をする 1 年前の夏くらいまでには十分な語学力と成績を持っているべきである。また奨学金の申請もこの時期であるから、結構忙しくなることを覚悟しておく必要がある。

さて、十分な成績と語学力を手に入れ、選考を通過したならば事務的な手続きに入る。例えばビザや寮選びなどについてである。これは留学先に依存するとしか言えない。例えばスイスの場合、ビザを取る必要がない。したがって渡航準備はほとんど何もしなくてよいが、大学の寮がないため、自分でフラットを契約する必要がある。スイスは物価が高いので家賃も高くなることがあるため、安く、かつ良いフラットに住もうと思うと情報収集が肝になる。例えば大学に頼んで同じ留学先の先輩と連絡を取ったり、トビタテ生はトビタテ留学 JAPAN のコミュニティに頼るのが良いと思う。

留学中の生活

留学中の生活の細かいことが気になる読者は、初めにでも述べたが例えば大学の web サイトにある留学体験記や他にも youtube で vlog として留学生活を動画にしてアップロードしている方はたくさんいるので、そちらを参照するとイメージがわきやすい。そこで調べればすぐ出てくるようなことは書かずに、逆に書かれていなかったような次のポイントを指摘したい：天候の大切さ、文化やシステムの違い、そして勉強についてである。

留学体験記を読んでも、留学先の説明として天候に触れることがあっても、しっかりと述べているものはあまりないように思う。しかし、天候は留学のとても重要な要素であると考えている。例えばスイスの場合、秋冬の日照時間が日本に比べるととても短い。日照時間が足りないとビタミン D が不足するらしく、その結果かなり精神的に落ち込みやすくなる。大体留学は秋セメスターから始めるので、新しい環境に慣れず知り合いも少ない状態で冬を過ごさなければならないため、かなり大変であったことを覚えている。したがって北半球でかつ緯度の高い国に留学する際は気を付けたほうが良い。具体的には日本にいる段階から同じ大学に留学する友達を作っておくなどが考えられる。家族や恋人にこまめに連絡するとよいという人もいるが、私の場合逆に会えないことが辛くなって良くなかった。また、留学の目的が「海外経験」など地域が限られるようなものでないならば、留学が日照時間の長

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

い夏から始まるような南半球の国、例えばオーストラリアに留学することを個人的にはお勧めする。文化やシステムの違いも大切なポイントである。具体的には、医療制度及び食事には気を付けたほうがよい。まず医療制度であるが、国によってまちまちで、例えばスイスの場合ホームドクターを探して何か病気にかかったら医者に個人的にコンタクトを取り、日にちを設定して、ようやく診てもらうシステムになっており、医療費もかなり高い。一番良い方法は留学期間中ずっと健康でいることであるが、念のために医療システムは把握しておくべきである。次に食事だが、これは何が主食でどんな料理があるのか、ということだけではなくて、スーパーはいつ空いているのか、レストランで食事をするとどれくらいかかるのかというものである。留学したらわかるが、日本はこの点においてかなり便利な国である。コンビニもファストフード店も深夜まで空いているので、お金をあまり持っていなかったとしてもいつでもどこでも食べ物にありつくことが出来る。しかしこれはかなり恵まれた場合であり、例えばスイスの場合、大体のスーパーは遅くても夜 8 時には閉まるし、土日は基本的に空いていない。したがって買い物をこまめにする必要がある。さらにレストランは物価のせいでかなり高いため、学生が気軽に利用できるものではない。これらの事情によって、スイスでは私は週 1 回こまめに買い物をし、毎食自炊を強いられた。このように広い意味での食文化によって生活が大部分規定されうる。

最後に勉強についてであるが、これは専攻に依存するだろう。私の専攻である物理学の場合は、授業のシステム自体はあまり変わらなかった。スイスの方がフォローアップが丁寧、teaching assistant(TA)が教えてくれる、テストが oral exam といって口頭試問であるなどの違いはあったが、「週 1 回教室で教授の説明を席に座って聞く」という点においてはあまり変わらないと思う。ただ一つ言っておきたいことは、よく留学体験記などを読むと「日本よりも勉強させられる」「海外の大学の方が質が高い」などの意見がよく見られるが、これらについて私は否定的な立場である。どの国のどの大学も、ある程度は同じ内容を習うのであるから、海外の大学の方が勉強するということはあり得ない。もしこう感じるのであれば、その人が日本にいたときにしっかりと勉強をしていなかっただけである。たしかに日本の方が単位取得自体は簡単かもしれないが、ちゃんと勉強していれば差はない。私の場合、確かに教材が充実していたのはスイスの大学であったが、学生のレベル及び教授の教える内容のレベルは日本の大学の方が高いと感じた。

留学後について

留学アドバイザーをしていると、留学後の進路についてもよく質問される。文系学生からは留学中と留学後の就活について、理系学生からは留学後の院試について聞かれる。私は理系でかつ海外の大学院の院試しか受けていないので、日本の就活及び院試については友達から聞いた話をここで少しだけ書く。ところで、留学は大体 5～6 月に終わって帰国する場合が多い。この時期は就活ではほとんど佳

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

境といってよい時期らしく、日本の(理系の)院試は大体 7～8 月なので出願時期くらいであろうか。留学が就活に与える影響について、良い面も悪い面もある。良い面は、留学したという事実自体が高く評価される点だ。とは言っても昨今留学経験を持つ学生はかなり多いので、留学をしているだけで良い会社に入ることが出来るわけでもないが、多くの場合企業は留学経験者を評価しているらしい。加えてキャリアフォーラムの存在も大きい。キャリアフォーラムをうまく活用すると場合によっては実質就活期間 3 日で内定が取れることもあるらしく、イリノイに留学していた同期もキャリアフォーラムだけで内定を取っていた。ただ留学の及ぼす悪影響もやはり存在していて、日本にいないので就活で得られる情報が少なく、スケジュールもかなりタイトになるらしい。

日本の大学院に進学しようと思うと状況はもっと厳しい。基本的に日本の大学院は院試を合格しないと入学できないので、受験の年の春くらいから院試対策として勉強を始めるが、留学していると授業または研究等でそれが厳しくなる。また院試では専攻の知識のみが問われるので、留学していたという事実は何も手助けにならない場合がほとんどであると思う。したがって今いる大学とは異なる大学院を受験しようとするとそれなりに大変なのではないだろうか。

最後に私の大学院受験について少し話をしよう。先ほど留学は 5～6 月ごろに終わると述べたが、私の大学では 8 月の終わりまでテストがあったので、それを受験してから帰国した。したがって、日本の大学院は受験できなかった。そのため、海外の大学院を受験するしか道はなかった。今思うと、退路を断つという点ではよいかもしれないが、リスキーすぎるのであまりお勧めしない。大体が 12～1 月に出願締め切りであったので、その時期までに卒研をしながら、TOEFL を受けなおし、GRE[3]を受け、SOP[4]を書き、推薦状を揃えたりしていた。この時期が最も大変だった。大学院受験の詳しい話については本記事の主旨からずれてしまうので割愛させていただくが、次に(つまり PhD で)出願するときはもっと時間に余裕を持って準備すべきだと痛感した。

終わりに

留学と聞くとおそらく何も知らない人には「なんか楽しそう」と思うだろうし、調べたりしたことがある人にとっては「色々大変そうだな」と思うかもしれない。私自身「修士を海外でとるってなんかかっこよさそう」から始まり、「大変な」経験をしてようやくもともとの目標のスタートラインに立つことが出来た。個人的には日本は素晴らしい国であり、日本で出来ないことは他の国でも出来ないだろうと思っている。したがって他の人に留学を勧める気はない。しかし、「留学を考えているが、今は時期尚早なのではないか」と考えている人に対しては、「時期尚早では決してない、遅すぎる」と言いたい。留学準備のセクションを見たらわかるように、英語、成績、情報収集など、やることはとて

[3] 学術系大学院入学希望者を対象とした学力試験
[4] 志望理由書

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

も多い。今この時点で留学したい(が、何もしていない)としたら、実際に留学するまで最低 2 年はかかる。少し絶望的なことを言うと、読者が大学 2 年生とすると、留学に行けるのは頑張って大学 4 年の秋からで、この場合留年しなければならない。もし学部生が大学院で留学できればいいやと考えているならば、今日から準備を始めないと大学院で留学は出来ない。お説教臭くなってしまったが、少しでも興味があるならば、今すぐ始めよう。最後に本記事が留学に興味のある方に役に立つことを願いつつ、筆を置くことにする。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【海外留学レポート】

留学の本質

ノブレス・オブリージュ

The Nature of Studying Abroad: Noblesse Oblige

ボストン大学 4 年　**小林　聖弥**

KOBAYASHI Seiya

(Undergraduate Senior, Boston University)

キーワード：ボストン、学部留学

はじめに

日本国外で長期間生活をしたことのある日本人と、したことのない日本人とでは、意識の上で大きな違いがあるように思われる。海外で暮らすということは、それまでの自分個人の中で確立されていた価値観のようなもの、あるいは倫理観のようなものが破壊され、自分を含めたあらゆるものの存在や実体が、相対的な関係性に基づいて再構築されるということである。端的にいえば、それは人生において、世界を視る目を本質的にアップデートできる絶好のチャンスであり、留学とは、学生のうちに海外でそういった経験値を積む唯一といっても良い大変貴重な機会である。このレポートでは、自身が米国の大学で留学をする中で考えたこと、折に触れて感じたことをいくつかピックアップして紹介する。

大学に通う意義

「なぜ大学に通うのか」という問いは、四年間の大学生活を送る上で幾度となく直面することとなる疑問であろう。特に米国の大学に通うためには、多額の授業料や生活費が嵩むこととなるため、学生生活を送っていく中で否が応でも大学教育の費用対効果や、わざわざ海を越えて海外で学ぶことの意義について考えさせられることになる。無論、社会的信用が上がる、専門知識を学ぶことができるといったことは確かであるが、果たしてそれが大学の本質的な価値であるかと言われると、必ずしもそうとはいえない。大学を出ずとも社会的に成功している人は数え切れない程おり、専門知識に関しても昨今は EdTech と呼ばれるように、オンラインで専門知識を習得することも比較的容易である。つ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

まり、大学の本質、留学の本質はこれ以外のところにあるべきなのだと考える。

「人生を変えるための三大要素は、時間の使い方・友達・住む場所であるからそれらを大事にしなさい」と助言を受けたことがある。まさにその通りであると思う。教育を施す教授陣と、教育を享受する学生が一つの場所に集まって議論を交わすことにこそ大きな価値があるのではないか。またそこに集まる人々も皆が皆同じようなバックグラウンドであったり、思想が似通っているようではあまり活発な対話は生まれてこない。考え方が違ってこそ、例えば自らの頭の中で考えていることを外に効果的に伝えることの難しさを認識することができ、そのような対話の繰り返しが結果的に他者の理解、世界や社会の理解に繋がるのである。俗に言う多様性とは、そういった意味では自己の内面を映す鏡のようなものであり、留学における多様性は他者理解と共に自己理解をも促す潤滑剤のような役割を果たしているように思われる。

一方で、多様性とは何も人種や思想に拠るものだけではない。大学とは、「学びの多様性」を模索することの出来る絶好の環境・タイミングであると感じる。大学においては、何か学びたいものがあったときに、「それをどうやって学ぶか」と学び方の選択肢の数を増やしながら、自分に合った学び方を見つけるための時間が十分に確保されているのである。必ずしも大学で学びたいことが全て学べるわけではないが、少なくとも本や論文を読む、人に訊く、人に教える、といったインプットとアウトプットの方法については色々と試すことができる。その試行錯誤を通じて自分なりの学び方が見つかれば、大学卒業後もどこにいようが、常にベストな方法で学び続けることが出来るようになる。常に自ら問いや仮説を立て、それを学びによって解決・検証していくサイクルを習慣化することこそ、大学卒業までに身につけておくべきことなのではないか。

留学の効用

三島由紀夫の小説「潮騒」にこんな一節がある。

“未知を遠くに見ていたあいだ、彼の心には平和があったが、一度未知に乗組んで出帆すると、不安と絶望と混乱と悲嘆とが、相携えて押し寄せて来たのである。”

これは主人公の新治が、彼が恋心を抱く初江という女性と密かに(初江の家族にバレないように)会おうとする際の心理描写であるが、個人的には、これと全く同じことが留学に関しても言えると考える。留学に行きたいと憧れを持つ段階では、留学というものはどこか遠い夢のような偶像であり、いざ実際に留学の準備を始めると如何にそれまでの自分が薄志弱行であったかを知る。また準備を終え、実際に現地へ行く前と、着いてからの心理状況の変化もこれと大体同じようなものである。留学とは、そのような心理的、実際的な試練の連続であり、それを乗り越えるだけの気力と体力が必要なのだ。

僕が高校生のときに留学を決意したのは、ふとした瞬間に「自分はアメリカに行かなければならない」と直感的に感じた、ただそれだけの理由である。その他の現実的で論理的な理由は全て後付けで

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

しかなく、その瞬間の自分の直感のみをただただ真摯に受け止めた。留学に行く前から、例えば就職のことを心配する人の気持ちも何となく理解はできるが、それでは留学の効用は何であるのか。単純に世間的な見栄えがいいからという理由で、僕は学部留学という道を選んだのではない。言うまでもなく、就職のことなど留学前には頭によぎってすらいない。振り返ってみれば、それは完全に内的な、独立不羈とした何か強い心の作用によって決定されたものであって、外的な要因にはほとんど作用されていなかったように思われる。

留学から何を得るかは、最終的には自分の意思と目的意識の強さ次第だ。ここで目的ではなく、目的意識という言葉を用いたのは、留学前後で将来の方向性や目標とするところは存分に変わりうるからである。あるいはもし仮に人生の目的が学生のうちに具体的に決まったところで、その目的から逆算してその後の人生を送るとなると、どうも完璧に計算された道を辿るような気がして、味気なさを感じてしまう。つまり、具体性のある長期的な目標は学生のうちには決まらない(決めない)と仮定すると、意識の変化を自然なものとして受け止めるだけの柔軟性と、どんな状況に追い込まれても自分を信じ続けることのできる精神力が、留学の効用を自分にとって最大化するために必要な2つの事柄であるように思われる。一定の解がないからこそ、留学は楽しいのであって、将来のためのツールといったプラクティカルな視点で留学を狭義に捉えてしまうのは勿体ない。

ボストンの歩き方

アメリカに留学することを視野に入れているのであれば、自信を持ってボストンをお勧めする。ボストンはこじんまりとした街である。章タイトルを「ボストンの歩き方」としたように、頑張れば歩いて回れてしまう規模感で、ボストン大学は街の中心部からやや西に外れたところに位置し、近郊にはタフツ大学やボストンカレッジが、隣町のケンブリッジにはハーバード大学やMITが連立している。ボストン市とケンブリッジ市の間にはチャールズ川と呼ばれる大きな川が流れており、夕暮れ時には各大学のレガッタのボートを浮かべながら、夕日を反射して燦然と輝いている。また、GoogleやFacebookをはじめとした多くのIT企業がオフィスを構えており、学生街でありながらオフィス街でもある不思議な街である。

ボストンに留学する最大の利点は、数多くの大学が集結している点である。東京でもなかなかボストンほど大学が密接に集まった街はないのではないだろうか。大学が集まっているということは、一つの大学を超えた繋がりができるということであり、また大学間の共同研究なども盛んに行われている。しかも、ボストンはただ単に大学が集まっている街なのではなく、歴史的にも古くから高等教育機関が集まっている伝統的な大学都市なのである。街中を占める赤レンガ作りの古めかしい建物も、そのような時の重みを含み、アカデミックな雰囲気をところどころで醸し出しているようにも感じる。ボストンの洗練された空気が、学業や仕事に打ち込む活力をそこに住む人々にあるいは与えてくれて

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

いるのかもしれない。

ニューヨークほどではないが、ここ最近ではボストンにも日本料理店が増え、牛角や山頭火(ラーメン)も複数店舗存在する。また、沿岸部に位置しているためシーフードが美味しく、牡蠣などは作家の村上春樹(一時期ケンブリッジで執筆活動を行なっていた)もマラソン後に好んで食べていたとも言われている。冬はチャールズ川が凍るほどの文字通り凍てつくような寒さだが、冬が明ければボストンマラソンがあり、ボストンコモンには色とりどりの花が咲き乱れ、レッドソックスの試合でボストン市民は盛り上がりをみせる。このような一つ一つのイベントも、ボストンにいるのだという感覚を絶えず与えてくれると共に、学問とはまた違った刺激を与えてくれる。僕にとって、ボストンは理想的な学生生活を送るための別天地であったというより他ない。

アメリカのリベラルアーツ教育

過去の個人的な体験として、フランス語を勉強したことによって英語力と国語力が相乗効果的に上昇したということがあった。一見すると、フランス語を勉強することはその他の能力を上げることとは無関係(むしろその分だけ時間が取られるため逆効果)なようにも感じるが、実際は各言語を相対的な関係性で捉えることによって言語力全体が底上げされる結果となっていたのだろう。これとアメリカのリベラルアーツ教育は非常によく似ている。幅広い分野を浅く学ぶことは、学問の全体的な構造を理解し、これからどの分野を学んでいけばいいかを考える(悩む)きっかけを学生に与えてくれるのである。僕は数ある学術分野の中から、元から興味のあったコンピューターサイエンスを専攻に、これから需要が高まっていく傾向にありそうな哲学を副専攻に選んだ。

しかし、何を専攻にするかは、大学(特に学部教育)においてはあまり本質的なことではない。「大学の意義」の章でも書いたように、大学に通う意義とは学び方の多様性を身につけることだからである。言い方を変えれば、スティーブ・ジョブズの「点と点がどこかで繋がる話」の点の数を増やすことが、大学において最も重要なことであり、リベラルアーツ教育は、まさにその点をより多く見つけるための便利なフレームワークを学生に提供しているのである。一方で、日本の大学ではまだまだ入学時に学部と専攻を仔細に決めなければならないところがほとんどであり、興味もない分野を四年間学び続けることになったり、入試難易度が高いというだけで医学部に入学したりする学生も少なくない。しかし、果たしてそれが大学教育のあるべき姿なのであろうか。個人的には、学部・学科と事細かに分けてその狭い領域の中で学生を泳がせるよりも、はじめから多数の選択肢を与えて学生に自由という名の悩みを与えることの方が、教育的意義があるように感じる。

だからといって、誰しもがアメリカに行けばいいというわけではない。各々にはそれぞれの性格があり、学びのスタイルがある。例えばはじめから物理を極めたいという信念を持っている人も少なからずおり、一概にリベラルアーツ教育が最善であると結論づけることは到底できない。リベラルアー

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ツ教育は便利ではあるが、万能ではないのだ。しかし、少なくとも生来横紙破りな性格である僕にとっては、思う存分悩ませてくれ、考えるきっかけとなるリソースを与えてくれるアメリカの大学のスタイルは性に合っていた。それがあるいは「留学の効用」の章で述べた当初の直感に繋がっていたのかもしれない。多様性やロケーションだけでなく、教育システムも、僕にとってはプラスであった。

最後に

「ノブレス・オブリージュ」というフランス語がある。高い教養や社会的地位の獲得・保持には、それ相応の義務が伴うという意味の言葉である。また、古代ギリシャの哲学者であるアリストテレスはこう述べた。「人間は社会的な生き物であり、その点において他の生物と一線を画している。」思うに、我々は生まれながらにして社会と繋がれ、あるときにはその恩恵を享受し、あるときにはその代償を払い、そのようにして極めて自然な形で自他を相互に助け合うように生きている。僕個人としては、米国の大学で学ぶという経験、またそこから得た学びの経験を、今後必ず何らかの形に変換して社会に還元していきたいと思っている。そして同じような意識を持つ人が少しずつ増えていけば、大学教育の改善だけでなく、結果的により幸福度の高い社会が形成されていくと願ってやまない。そのような願いも込めて、今回このレポートを執筆させて頂いた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

次号予告

特集「日本人学生のための留学支援」
留学相談、奨学金、キャリア支援、留学後のフォローアップ（予定）

編集後記

心地よい秋風が吹き抜け、ようやく過ごしやすい季節になりました。

さて、今月の特集は「海外の大学との交流」と題し、事例紹介では「COIL という教育手法の導入」、「シンガポール国立大学語学教育研究センター日本語プログラムの交流活動」、「日韓学生の協働によるグローバル人材育成」というタイトルでご寄稿いただきました。また、海外留学レポートでは、スイス留学とアメリカ留学についてお伝えしております。

今後も海外の大学との交流に携わる皆様に参考としていただけるような内容を目指してまいりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

（編集部）

Web Magazine “Ryugakukoryu”
(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.
The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)

ウェブマガジン『留学交流』2019年10月号

Vol.103

令和元年10月10日発行

編集　独立行政法人日本学生支援機構

（編集部）留学情報課

東京都江東区青海2-2-1（〒135-8630）
電話　(03)5520-6111
FAX　(03)5520-6121
Eメールアドレス　ij@jasso.go.jp

本誌へのご意見、ご感想は、こちらのメールアドレスまでお願いいたします。